

論文の内容の要旨

論文題目 「市場」・「風俗」・「統治」－近世日本と西欧の思想における商業社会の問題

氏 名 Mervart David

博士学位論文として提出する本稿は、徳川日本の政治思想の研究の分野において、比較歴史的観点を提供している。本稿に、二つの目的がある。その一つは、「風俗」論の日本における系譜とその古典的拠り所（主に儒教的言説のそれ）を検討し、江戸時代中期から後期にかけての思想について、いわゆる「商業社会」の成立に対処する際、「風俗」が主な概念的道具となっていることを確認し、商業、道徳、統治をめぐる議論において「風俗」概念が交差的役割をもっている、と示すことである。そして、いま一つは、このような設定で、商業を政治的・道徳的・歴史的問題とする言説が登場し、中心的なテーマとなった、ほぼ同時代の西欧と日本の思想に、一つの可能な比較視点を提供することである。

本稿は、荻生徂徠、太宰春台、海保青陵を中心に、18世紀の日本列島で活躍していた思想家の著書を通して、商業発展が人間の共同生活とその政治的秩序にもたらした変化を理解することに取り組んだ理論的営みの有り様を辿っている。世の中のあらゆる面が市場で交換可能な商品となりつつあるなか、物質的安楽と消費生活水準の上昇の追求は、反面、道徳的に望ましくない現象の起原となり、政体に危機をもたらす、と分析する思想家が17世紀から18世紀にかけて、古典的前例を踏まえながらも、この新しい世の中と新しい人間条件を語るための新しい概念的枠組みを打ち出していく。一方、このような言説の枠組みでの分析を通してこそ、政治的・道徳的なるものと「経済的」なるものとの関わり合いに対する理解が、いっそう多面的なものとなり、多様な議論展開をなしていった。そして、

以上の叙述は、日本についてだけでなく、ほぼ同時代の西洋、主にオランダ、イギリス、スコットランド、フランス、ナポリなどを中心に、西ヨーロッパの諸国における商業と統治をめぐる言説についても妥当する。

興味深いことに、このような変化を語る際、最も中心的概念用語となったのは、日本の場合、「風俗」であり、西欧の場合、「manners・moeurs」であった。これらの概念用語はそれぞれの言説的世界において類似性の高い位置づけと役割をもっていた。また、19世紀後半に、ヨーロッパ・アメリカから新しく導入された政治経済学・哲学・法学などの分野の著書をめぐる翻訳活動が大規模で展開される際、根本的概念用語を新規に定める必要性が相次いで生じたが、その中で、西洋語の「manners・moeurs」を訳す明治日本の知識人は、躊躇も無く、「風俗」（ときには「習俗」）を割り当てていた。

商業の発展がもたらしている（とみられた）変化のメカニズムは、「風俗」または「manners・moeurs」の変化として描かれ、理解された。商業発達により加速した歴史的变化が「風俗」の変化として描かれ、消費生活の「奢侈」が時代の「風俗」に根付いて火災や伝染病のように普及していくというのは、当時の典型的叙述パターンである。市場における消費と利害が人間関係の中心的所在（そして最大の問題）と認められるとともに、これらが社会にもたらす変化を語るのは、「風俗」（そして、同じく、「manners」）の語彙を通してである。この「風俗」の言説は、一見、後ろ向きの態度を発揮した道德主義的批判とみえるが、市場の広がり商品経済の普及による「風俗」の変化の原因と規則性に着目することにおいて、多くの場合、ある種の「社会学」的側面をもっている。古典的材料を踏まえつつ、この思想は、都会を中心に新型消費生活様式の確立の構造と法則性を分析し、そして利益追求と消費への憧れの心理的メカニズムの理解の方向性を示している。このような現状意識を踏襲した政治思想は、商業の世における習慣的「風俗」の変遷と人間性における「常」の特徴である「利欲」を既成事実と受け止め、その前提の上で統治秩序の構想と政治的行為の概念の再解釈を試みていた。

徂徠以来の江戸時代の思想において、「皆商賈の如く」なるこのような「商業社会」の問題は最も重大な課題の一つとなった。この史上異例な状況を分析するために確立した道具としての「風俗」の社会学、またその結果だった歴史的自意識は、江戸後期の思想において一種の「徂徠的モーメント」であると言える。また、「商業社会」という歴史的局面が孕んでいる道徳的・認識論的・政治的課題に対処しようとする思想は、おそらく近世日本と西欧との最大の共通点であった。徂徠以降のこのような問題意識を、フェネロン、フレッチャー、ルソー、ブラウン等の多くの西欧の思想家が、驚く程度まで共有していた。

近世日本の商業と統治をめぐる思想において、様々な意味で隠れたかなめである「風俗」については、これまで集中的に扱われた研究はほとんど存在していなかった。また、この設定での西洋との比較可能性が積極的に試みられたことも行われなかった。そこで、本稿では「風俗」論を入口に、「風俗」が前提となっている議論の視点から、主に江戸時代中期以降のいわゆる経世論的思想を再検討し、同時代のヨーロッパに目を配りつつ、西洋思想

の諸材料との比較をした。

上記の見取り図を、本稿の序論と第一章で打ち立てた後で、第二章から第五章にかけては、それぞれの「風俗」論の展開と機能を取り上げている。日常生活における習慣形成とその結果としての「風俗」に内在している圧倒的慣性と時間経過があらゆる「制度」の安定に及ぼす影響をめぐる言説（第二章）、理想的古代の基準で量った「風俗」の変化と人欲増大の推量歴史的叙述（第三章）、堂島米会所という大規模取引を代表例に、商業一般をめぐる道徳的批判的と弁解的言説の論争（第四章）、そして市場における「風俗」の変化の慣性が統治体制と権力行使に突きつけている制限を指摘した議論（第五章）が主なテーマである。

市場における「人心」と「利欲」の有様を、政治的秩序の構想にいかに関り込めばよいのか、また「公共の政」と「利欲世界」をいかに両立可能なものにするか、といった課題を扱った維新前後の思想に着目した研究が、最近の日本思想史における一つの重要な新境地を開いた。本稿はこれらの研究が前提とした問題関心をもって、視野をさらに前時代にも広げた。そのことによって、維新前後の商業と統治をめぐる議論には、荻生徂徠まで遡る序言を書くことが可能である、と示した。そして、徳川の世における以上のような言説を、「日本」という排他的枠組みにおいて理解するに止まらず、近世のヨーロッパとも共通している課題としての「商業社会」の問題に取り組む思想一般の興味深い一例として扱い得る、ということを主張した。